

『木立郷土史クラブ』について

紹介者 木 許 博

林 寅 喜

木立に生まれ育ち、或いは定住のため再びふるさとに帰り、また、離れて暮らす人、そんな人たちが集まって、ふるさと木立の昔を語り合い、先人の跡をたどってみようという発想から、平成三年五月郷土史クラブは誕生しました。

会は公民館活動の一環と考えて木立の歴史と民俗文化を掘り起こし、調査研究の経過並びに結果については出来るだけ多くの人たちに知ってもらうため、公民館報「きたち」を通じて必要に応じ情報の公開につとめ、一方では資料の収集とその保存にも留意しながら、話し合いによる意見の交換等を活動の基本と考えて、学習することを申し合わせ発足しました。

以下はこの十年間に調べた木立の歴史の一部を、これまでの経過をたどりながら別掲の「十年の歩み」(年度毎)に基づいて、項目だけをまとめたものです。

なお、詳しい内容の解説は別冊(B5判七十三頁)にして公民館にも保管しています。

平成三年度

- ・昭和三年木立小学校発行の『郷土読本』の中から六、七点について学ぶ。

- ・字図にない固有の地名と屋号ほかについて

- ・岸の上小野家に残る古文書(元禄十三年へ一七〇〇)の村高明細帳)について

- ・須留木・築良田方面現地研修

- ・熊野神社現地研修

- ・奥井春耕碑拓本採取

平成四年度

- ・元越山と十二段ほかについて

- ・『片野八ちよう塚六十、唐金かんすに黄金一杯』という言い伝えの場所と真偽しんぎの程について

- ・向島町小野家の古文書に記載された籠かご檐かたつぎ商人の十人について

- ・五輪塔と元禄墓の形式や特徴などについて
- ・目筈山の庚申塔、稲荷祠、灯笼等の調査結果について
- ・諏訪神社(須留木)創建の歴史について
- ・松樹寺の歴史を調べる。

平成五年度

- ・松樹寺の花祭りを復活する。
- ・婚礼や小祭りなどの諸行事について
- ・生目神社と竜王神社、及び白子姫祭りなどについて
- ・山内鍊爾と三輪修亭の経歴と事績について
- ・青山方面現地研修
- ・独歩と元越山について
- ・内山田家文書の「江戸からの手紙」について
- ・高令者学級と合同見学会(市立図書館)
- ・圃場整備地の出土品収集

このあと小学校六年生による社会科の野外学習で現地説明を二度行う。

- ・縄文・弥生式文化と土器の成り立ちについて学ぶ。

平成六年度

- ・旧教科書(明治八年〜昭和十六年)を九冊譲渡され、補修して回覧後小学校に保存を依頼

- ・五人組制度と皆合の職務などについて

第二回松樹寺花祭り

- ・再び十二段のことについて

- ・熊野神社の奉納額虞美人絵と天狗面について調べる。

- ・明治四年ごろの作という佐伯藩時代の屋敷図について調べる。

平成七年度

- ・第三回松樹寺花祭り

- ・村の大木について保存方法を検討する。

- ・蛍の自然発生について(大溝改修の成り行きを見守る)

- ・字図にない固有の地名を調べる。

平成八年度

- ・方言に取り組む(平成十年度まで継続)。

- 〔註〕右については東北大学より一部について照会が

あり回答する。

- ・第四回松樹寺花祭り

- ・字図にない地名の調査結果を公民館だより「きたち」に掲載する。

平成九年度

- ・第五回松樹寺花祭り

・ 仏像の見方について勉強

・ 元越山資料作り

・ 方言の中間まとめ

平成十年度

・ 県外一泊研修旅行(高千穂夜神楽見学)

・ 第六回松樹寺花祭り

・ 元越山特集と奥井春耕くんびら特集を公民館だよりに掲載。

掲載。

・ 方言の最終まとめ(百十七の方言について南都市十三

地域に同語の照会)

・ 木立に伝わるわらべ唄・仕事唄について佐伯史談会より

異同について諮問を受け検討する。

・ 福泉九郎右衛門について(木立の福泉姓と関係はある

かなど)

平成十一年度

・ 一石一字塔の発見による結果報告

・ 第七回松樹寺花祭り

・ 木立の氏について(戦前・戦後の居住者百十余の氏に

ついて調べる。これは今も継統中)

平成十二年度

・ 木許会員著「碑文の解説」について要旨の説明を受く

・ 第八回松樹花まつり

・ 木立に残る民俗行事について

・ 旧家に残された火縄銃の調査結果について

・ 県外日帰り研修(宇納間・百済の里・美々津方面)

木立郷土史クラブ 十年の歩み



鳥の甲斐 (船松村)

〔付記〕 木立地区の概要

・ 面積 一三・四一三^{平方} 東西五キロ

南北七・五キロ

平成13年5月発行 A6版全18P

・人口 二一四六(男一〇二〇、女一二二六)

世帯数七一一(平成二二、三現在)

・沿革 明治二十二年木立村発足

昭和三十年佐伯市に合併

平成十二年十九自治区を九自治区に統合、市の行政区は旧村のままの形態を保つ

・交通 市街地から蒲江町へは三八八号で、米

水津村へは土井の分岐点から色宮港木立線で結ばれ、二路線共地域を縦貫する。佐伯駅へは車で約二十分

・産業 基本は農業、ほかにイチゴ・バラ等の

ハウス栽培が盛ん

・住民性 勤勉実直で人情が厚い

・その他 元越山(五八一・五ノミ)は地区のシンボルとして毎年二月登山会を行い五百人ほどの参加者がある。

中山峠

佐伯大橋で番匠川を渡り、右に折れて地方道佐伯―蒲江線。約一*でトンネル。これを出ると左に中山団地がある。ここらあたりが中山峠である。いま峠の面影はほとんどない。かつての峠の坂の下にトンネルが掘られたが、現在はさらに新しいトンネルが通じ、様相は一変した。

峠の北は下城台地、南は八幡山。中山峠は、大友方佐伯軍の最初の本陣が置かれた場所である。梅牟礼城に送った勅降使を斬(き)られた島津軍は、佐伯氏に降伏の意思がないことを知って攻撃を決意、天正十四年(一五八六)十一月初め、土持親信と新名親秀を大将とする薩摩、日向の二千人を佐伯に向けて出発させた。

島津軍は直川村赤木から峠越えして侵入、四日早朝、大越川沿いに下って府坂峠から堅田に入り、宇山、汐月に主力を置き、前軍を下城付近に展開させた。一方、梅牟礼城ではこの朝、大越川流域の岸河内付近にあがった煙を発見、島津軍の攻撃を察知して、さっそく戦開配置についた。

大坂本、切畑、中野の各口に三百五十一八十の兵を向かわせると同時に、客將の山田土佐入道匡徳の指揮のもと、堅田三十六人の武士を中心に千八百余人が中山峠に陣を敷く。

この日は朝霧が濃かったといわれる。戦いは足軽鉄砲の撃ち合いに始まった。島津軍の鉄砲の音で軍勢の配置を知った佐伯軍は、先陣が八幡山から馬印を先頭に駆け下る。地の利に地元勢と、山越えに苦勞してきた薩摩、日向の混成軍。それに加えて深い霧。佐伯軍は最初から優位に戦いを進め、退却する島津軍を追って大越川を渡った。「峠シリーズ⑩」・大分合同新聞・昭和五十三年一月十六日版。

「大友興廢記」